

2011.01.30.

T.Kobayashi

ひさしぶりに大相撲観戦ひとりごと  
～平成23年初場所を終わって～

再び連勝の記録に挑むと思われた白鵬が思いがけず難敵と化した稀勢里に敗れてしまった。それでも一敗を堅持して、連続六場所優勝を達成。優勝争いとしては予想通りでしかも単純ではあったが、個々の内容は比較的面白い場所だった。番付を追って場所の感想を述べて見ることにした。

## 1. 横綱編

白鵬の相撲は相変わらず低い重心と教科書通りのすり足が光り、安定感は図抜けていた。しかしながら、豊真将にやや苦戦し、稀勢の里に敗れたあたりから数日は腰の位置がやや高めに見えた。後日の報道によれば風邪で発熱をしていたということだった。腰高であることから、突き・押し・いなしへの対応に若干不安定さが露見した。この不安定さも日を追って改善し終わって見れば14勝1敗、後に追従する力を持たぬ大関陣を尻目に優勝を手中にした。来場所朝青龍の七場所連続優勝に並ぶ可能性は大きいと思われる。

## 2. 大関編

大関で10勝できたのは琴欧洲だけという情けない結果となった。9日目まで1敗を守ってはいたが、腰が割れぬまま上半身だけを必要以上に前傾した体型は負けを予測できる相撲っぷりだった。さらに相手に覆いかぶさるようにして、横から「くの字型」にした腕でまわしを取るというスタイルが多く「肩に力を入れた相撲」が目立った。脇を閉めて腰で相撲を取るスタイルをマスターしないと現状の打破は難しいだろう。

日馬富士は本場所に出られるような体とは思えず、勝ち越すのがやっとだったのでコメントのしようもない。把瑠都も新たに痛めた膝の故障が加わり、膝を折って腰を割った相撲は殆どとれていなかった。勝った相撲でもバタバタした取り口と、巨体と腕力だけで辛うじて勝てたというような内容が目立った。

魁皇にはもはや大きな期待はかけるべくもないが、前半・中盤の土俵を盛り上げたのは評価できる。引退が近いと思われる大関が大関同士の取り組みで2勝1敗、他の大関は何をやっているのだという感じがする。大相撲改革の一環として、「大関の地位を権威あるものにすること」と「強い横綱を作る」ことを目的として「大関選考の基準見直し」と「大関在位基準の新設」は必須と思われる。

「大関選考の内規」として現在の「三場所勝ち星」に加えて「直前六場所勝率」を、「大関在位基準」として現在の「二場所連続負け越したら陥落」に加えて「六場所勝率下限」を新設することを提案したい。

## 3. 関脇編

「関脇が強い場所は面白い」と昔から言われているが、今場所を面白くしたことは事実である。

自分の相撲の勝ちパターン（自分の相撲の型）ができている琴奨菊が先場所に引き続き好成績をあげた。琴奨菊の次なる課題は「きれいな立ち合い」であろう。いつまでも尻を振って手をつく動作に入らない立ち合いは、相手の「待った」を誘発するばかりか自分の立ち合いの勢いをそがれる結果にもつながる。この問題を解決すると、さらに勢いのある立ち合いが実現することで「自分の型への移行」が容易になると考えられる。

二場所連続で白鵬に土をつけた稀勢の里も琴奨菊の11勝4敗に続く10勝5敗の好成績を上げた。星数では一つの差しかないが、相撲の内容では琴奨菊にかなり劣る内容と言われても仕方がない。

稀勢の里の相撲には型がない。「こうなれば絶対勝てる」という絶対的なスタイルがないので、相手が脅威

を感じない。「きちんと手をついたきれいな仕切り」と「気合いの入った仕切り」は評価できるので、この後の流れの確立を望みたい。

いずれにせよこの二力士は「名関脇か？大関候補か？」の帰路に立っていることは確かなようだ。

#### 4. 小結編

小結陣は目立たない存在だった。栢焔山は相変わらず前に落ちる負け方が目立ち、6勝9敗という惨憺たる結果。先場所の貯金を使い果たした感がある。鶴竜は前半の連敗がたたり、辛うじて勝ち越しをすることができた程度の状態だった。ただ、前半に4連敗しても勝ち越しできる力があるという見方をすれば、力を付けてきているともいうことができる。

#### 5. 前頭上位編

先場所白鵬と優勝決定戦を演じた豊ノ島に期待する声が多かったが、欠点とされる「胸で受ける立ち合い」「深く差し込み過ぎる差し手」「反り身の相撲」が目立ち良い結果を出すことはできなかった。前半の1勝7敗から8勝7敗に持っていくことができるのはさすがとは言えるが、やはり短軀を活かして「鋭い立ち合い」と「前まわしを狙って」「突っ走る」相撲に切り替えた方が良いと思う。

豊真将によりやく「攻め」の相撲が見えてきたので、今場所はかなり行けるのではと思った。しかし後半失速してしまい、辛うじて勝ち越したという程度にとどまったのは残念だった。よく稽古をして、基本をきちんとマスターできている力士なので大成を期待したい。

前半連敗した豪栄道はやはりまだかなと思わせたが、何と五日目から10勝1敗と持ち直して11勝をあげた。稀勢の里と同様に自分としての型がまだ定まっていなく、瞬時に判断して様々な勝ち方をする「器用さ」だけで相撲を取っている感じがする。鋭い立ち合いの踏みこみと、自分の型に持っていく二の矢が欲しい。

徳瀬川の相撲には新入幕の時から注目している。四つ相撲の基本を心得ており、まわしの取り方やとる位置に教科書を見るような確かさがある。毎場所毎場所少しずつ実力を付けてきているのが目に見える。かなり中身の濃い稽古を重ねて来ていると思われる。技巧派力士として三役を狙う位置に近づいてきたので今後大きく期待できる力士の一人である。

鳴り物入りで上がってきた臥牙丸は、体でとるだけの相撲でありあまり進歩もしているようには見えない。相撲内容もさることながら、取り組み中に尻や股間が見えそうになる「ゆるふん」は何とかしてもらいたい。この件はNHKの相撲解説で北の富士も指摘していたが、「まわしを締め直して出直してこい」と言いたい。

臥牙丸と同じ北の湖部屋の北太樹は地味ながら9勝6敗の成績を上げた。土俵上の所作が基本通りできれいであることと、左四つの型を持っていること、後ろに下がらない相撲をとること、相撲の流れの中で「機を見るに敏」を感じさせる素早い対応動作などが光る。残念なことに入幕当初に痛めた膝の故障を未だに引きずった形になっており、怪我がなければ今頃は三役に定着できたかもしれない。

若の里は前半戦を7勝1敗で折り返し、もしかすると・・・と思わせるような「若の里相撲の復活」を感じさせたが、その後14日目まで連敗が続いて千秋楽によりやく勝ち越しとなった。技の切れ味に相撲の美しさや力強さを持っているベテラン力士にまだまだ活躍してもらいたいものである。

#### 6. 前頭下位編

隠岐の海が初の敢闘賞を受賞した。大鵬を彷彿とさせる体格ではあるが、なまくら四つでしかも攻めがないというのが先場所までの隠岐の海。今場所は突然の変身で、前に出る速さが光り11勝4敗は見事。日本人力士の活躍と上位進出が求められる昨今、是非この期待にこたえてもらいたいものである。

黒海は体が一回りしぼんでしまって張りがなくなった。肘の痛みにも耐えながら相撲を取っているように見え

たが、体のしぼみ具合から見ると肘の痛み以外にも問題を抱えているように見えた。2勝13敗では来場所十両への陥落が予想される。

愚直な突き押し相撲に徹する豊響が久しぶりに戻ってきた。勝ち星の決まり手は「突き・押し」が殆どだが、負けの決まり手の中に「引き落とし・はたき込み」が目立つ。つまり、相手が耐えられずに引きやはたきをしたくなるような鋭い突き押しであることを物語っている。この愚直な相撲ぶりが好きだ。自分が前に落ちなくなるような稽古を重ねればもう少し上位へ進めるだろう。

若の里と同じように前半を7勝1敗で抜けた栃乃洋は、36歳という年齢を感じさせない体の動きで11日目まで優勝争いに参加した。後半は思い通りには進まず、結局9勝6敗に終わったが、あと1勝していたら敢闘賞をあげても良いぐらいだった。

8勝7敗に終わりはしたが、蒼国来の相撲は着実に進化していることを示していた。さほど大きくもない体ではあるが、足腰の良さと腕力とスピードから繰り出される動きは見ていて面白い。徳瀬川とともに見て楽しい相撲取りである。千秋楽にようやくの勝ち越しではあったが印象に残る8勝7敗だった。

## 7. 立ち合いが汚い

この場所は立ち合いが乱れっぱなしだった。力士の所作の背景にはルールのあいまいさも大きな存在としてある。大きな原因は力士自身にあるだろうが、その試合を司る行事にも大きな責任があると感じた。

取り組みを裁く行事は大きな声で数々の指示や注意を発しながら軍配を裁くが、その台詞や動作が形式ばかりのものになっていて機械的に発しているにすぎない。「行事が発するいくつかの指示に対して力士が従わない場合には軍配を返さない」というような絶対的な権力を持った強い姿勢が必要ではないかと考える。

土俵の周囲に座っている審判部のメンバーたちの動きにも問題がある。仕切りの動作にクレームをつけるのは審判長だけで、ほかの審判が注意を与えるケースは見たことがない。勝負後の物言いと同じように、すべての審判が異論を唱えるようにする必要があるように思う。

呼び出しに呼ばれて土俵に上がる時から勝負が始まるまで、相手の一挙手一投足に注目して目を離さない。この基本ができていない力士はきれいな立ち合いができていない。朝青龍・白鵬は仕切りの最中に一時たりとも相手の動きから目を離していない。そそくさと所定の動作を済ませて自分勝手な動作に時間をかける力士が多くなってきた。色々な意味で基本に帰って、きれいな立ち合いによる面白い取り組みを展開してもらいたいものである。

## 8. 四股名はきれいな方が良い

その昔、力士の四股名は「錦・花」などの美しさを語るものや故郷の景色や日本の原風景を現す「山・川」などが多い時代があった。近頃では外国出身の力士が登場する関係もあるが、「名前の美しさ」や「語彙語感の美しさ」からかけ離れた四股名が目立つようになってきた。

把瑠都凱斗（ばるとかいと）＝バルト海北端のエストニアの出身であることと、本名の「カイド・ホーヴェルソン」から付けられたと聞いたことがある。

日馬富士公平（はるまふじこうへい）＝だれもが素直に読むことが難しい名前だったが、慣れてしまえば？  
阿覧欧虎（あらんはくとら）＝本名の「ガバライエフ・アラン」から取ったものと思われる。なぜ「欧州の虎」なのかと「はくとら」と読ませる訳はわからない。

豪栄道豪太郎（ごうえいどうごうたろう）＝いささか硬い名前ではあるが、「豪」の字にそぐわぬ相撲になれば面白いと思う。埼玉栄高校の出身で、本名は「澤井豪太郎」だから仕方ないか。

臥牙丸勝（ががまるまさる）＝四股名の由来を聞いたことがないが、日本語として意味を想像してみるとよくわからなくなる。おまけに「ガガマル」という言葉の響きがあまり美しくないが……。これまた強くな

れば気にならないのか？

近頃稀に見る古風で美しい四股名が、初場所で活躍した「隠岐の海歩」。故郷の応援を背に受けている感じがして良い名前だと思う。師匠（元横綱北勝海信芳）に負けぬ稽古で上位を目指して欲しい。

## 9. 来場所の展望予測

優勝候補第一番の白鵬は動かざるところであろう。琴奨菊・稀勢の里の実力が本物になってくれば再び場所を盛り上げて、いずれかが抜け出して一枚上の座をつかむきっかけの場所になるかもしれない。とは言っても、この二人はむらがあってこれまでも何度も上下を繰り返しているので、始まって見ないとわからない。大関陣はこれから一人二人陥落または引退に向かう可能性の方が強く、横綱を目指して誰かが抜け出すことはまず考えられないことだと思う。

関脇・小結と前頭上位に期待するところ大であるが、特に初場所に活躍した力士達が引き続きよい動きをしてくれると面白い場所になるに違いない。豪栄道・隠岐の海・豊真将・徳瀬川など若手の成長に期待したい。

以上